関わり続ける定住のカタチの実践による
「結の故郷」づくりに向けた基礎的研究

～地域への愛着と定住意識～

令和３年３月

関西大学　環境都市工学部

北詰　恵一

目次

第 1 章　背景と目的 1
第 2 章　既存研究・報告書からの各要素の捉え方 2
2.1 地域愛着の捉え方 2
2.2 定住意識の捉え方 3
第 3 章　本研究の位置づけ 4
第 4 章　本研究で検証する仮説 5
4.1 本研究の仮説 5
4.2 本研究での各要素の定義 5
第 5 章　研究方法 7
5.1 研究方法 7
5.2 アンケート概要 8
5.3 アンケートの質問内容 9
5.3.1 「②定住意識に関して」の質問内容 9
5.3.2 「③大野市への”想い”について」の質問内容 10
5.3.3 「④地域資源との関わりについて」の質問内容 10
第 6 章　アンケートの分析結果 12
6.1 アンケートの基本集計結果 12
6.1.1 アンケート概要 12
6.1.2 現段階の住む予定の集計結果 12
6.1.3 現段階の定住意識の単純集計結果 14
6.2 定住意識と地域愛着の関係性分析 15
6.2.1 定住意識と地域愛着 16
6.2.2 定住意識と地域愛着の重回帰分析とクロス集計 17
6.2.3 地域愛着と定住意識の共分散構造分析 20
6.3 地域愛着と地域資源接触との関係性分析 24
6.3.1 地域資源接触の単純集計結果 24
6.3.2 地域愛着が高い高校生とそうでない高校生の特徴 25
6.3.3 地域愛着を醸成する効果的なシチュエーション 26
6.3.4 地域資源と最もかかわった時期と地域愛着の関係 27
6.4 地域資源接触による定住意識醸成のプロセス分析 30
第 7 章　まとめ 32
7.1 本研究の結論 33
7.2 大野市への提案 34
参考文献 36

第1章　背景と目的

地方部では，若者層を中心とした人口流出が増加している．それは，地方の過疎化や高齢化が進み，地方存続の危機に直面することにつながる[1)]．また，全国的にも人口は減少傾向にあり，現段階も各地で人口が減少していることから，地方都市の人口を増加させる政策の実現は困難であると考えられる．この問題に対して，長期的な視点から若者の担い手育成や人口減少が招く問題を防ぐために，例えば総務省は，今後の魅力あふれる地域形成を目指して，「定住自立圏構想」を打ち出している[2)]．また，各自治体では定住意識を踏まえた市民意識に関する調査を行い，総合計画に反映している動きや，大野市においても今後も住み続けたいと思えるまちづくりに活かすことを目的とした「高校生議会」が開かれていることから，若者をはじめ定住意識を促進する重要性は，現段階でも必要とされていると解釈できる．その中で既存研究や自治体の報告書から，定住志向や地元回帰の要因として，実家があることや仕事環境を理由とした人がほとんどである．ただ，地元の自然環境・居住環境に魅力を感じ，住み続けたいと感じたり，ある程度の年齢になって地元に帰ってきたりする結果もあることから[3,4)]，若者が定住意識を高めるためには，地域に強い思いを持ってもらうことも重要になると考えられる．また，40~70 代がメインではあるが，そういった地域への想い「地域愛着」を醸成するものとして，地域資源接触が挙げられている[5)]．その他にも，今日では関係人口等のワードが出てきたことにより，外部人材の重要性も叫ばれ，本研究の対象となる福井県大野市においても，「大野へかえろうプロジェクト」のように，いずれは帰ってきてもらいたい，地元もしくは外部から地域を支えてほしいと言う，大野市をはじめ，市民の期待も大きい．このことからも，定住・離脱前の大きな転機となる高校生には，卒業した後も地域との関わりを強める為に，高校生にとって効果的な地域に存在する地域資源との触れ合いの中で，高校生が地域や地元の人等への想い「地域愛着」を高め，住み続けたいなどの定住意識を醸成させることも一つ重要となるだろう．そのためにも，定住・離脱する転機となる若者「高校生」までには，「地域愛着」を醸成し，「定住意識」を高めてもらうことが必要なことが考えられるため，高校生にアプローチをする．

この背景から読み取れる課題に対して，本研究では地元から定住・離脱する前の高校生にとって，今後の地域との関わりを強めてもらうために，高校生の地域愛着と地域資源接触この二つの観点に着目して，地域資源接触と高校生の地域愛着および定住意識の関係性を明確にすることを目的として，上記の課題に応えることとする．

第2章　既存研究・報告書からの各要素の捉え方

2.1 地域愛着の捉え方

「地域愛着」の規定要因について，年齢や居住年数の他にも周辺環境や近隣住民との接触が地域愛着に影響を及ぼすと指摘されている.また，日常的な移動の中での地域資源との接触が影響を及ぼすといったように，様々な研究結果が報告されている [6,7]．また，堤の研究からも地域資源との接触は地域愛着を醸成することにつながると指摘されている [5]．さらに，地域愛着については，風土接触量が大きくなることにより，比較的短期間で 地域愛着(選好)が有意に高くなり得るが，地域愛着(感情)と地域愛着(持続願望)は，地域愛着(選好)を介して，長期的に影響を及ぼす可能性があるという報告もある [8].このことから，地域愛着の各指標にはそれぞれ相関性があることも解釈できる.

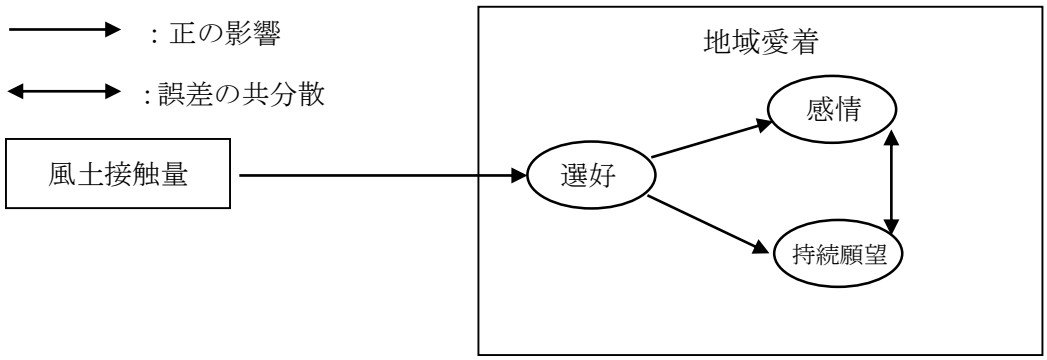


図 1 風土との接触量の変化と地域への感情の関係についての仮説

堤 [5]や鈴木ら [9]の研究から，地域愛着が強いものほど地域の活動に協力的になると示唆されている．羽鳥ら [10]の研究においては，地域愛着が醸成されれば，スポーツ・趣味・娯楽活動に正の関連，他者への依存度低下，伝統を重視，市民活動への参画に対する周囲への賛同に影響することがわかっている．つまり，堤研究では地域資源接触量を増加させれば，協力的行動を促すことができると挙げられているが，地域愛着の既存研究のように，様々な協力的行動を地域愛着は促していることがわかる.

2.2 定住意識の捉え方

「定住意識」に関して，今後も住みたいという人や地元回帰をする人の要因として，進学先や就職先があるかどうかの進路環境や，地元回帰に関しては，実家があるからという要因が大半を占めている．しかし，自然環境や居住環境等の「地元やそこに関わる人への想い」というのも，一つの要因として結果が出ている[3,4]．また，菊澤ら[11]の研究論文によれば，自然環境，利便性，社会関係資本が定住意向の規定する要因として，上げられている．ただ，それらの変数以上に「幸福度」というものが，定住意向に最も影響を与えていることが示唆されている．さらに，その「幸福度」は，健康，仕事への満足度，市民活動への参加意欲によって規定されていることがわかったことから，それらの変数が「幸福度」を介して間接的に定住意向を規定するということがいえる．

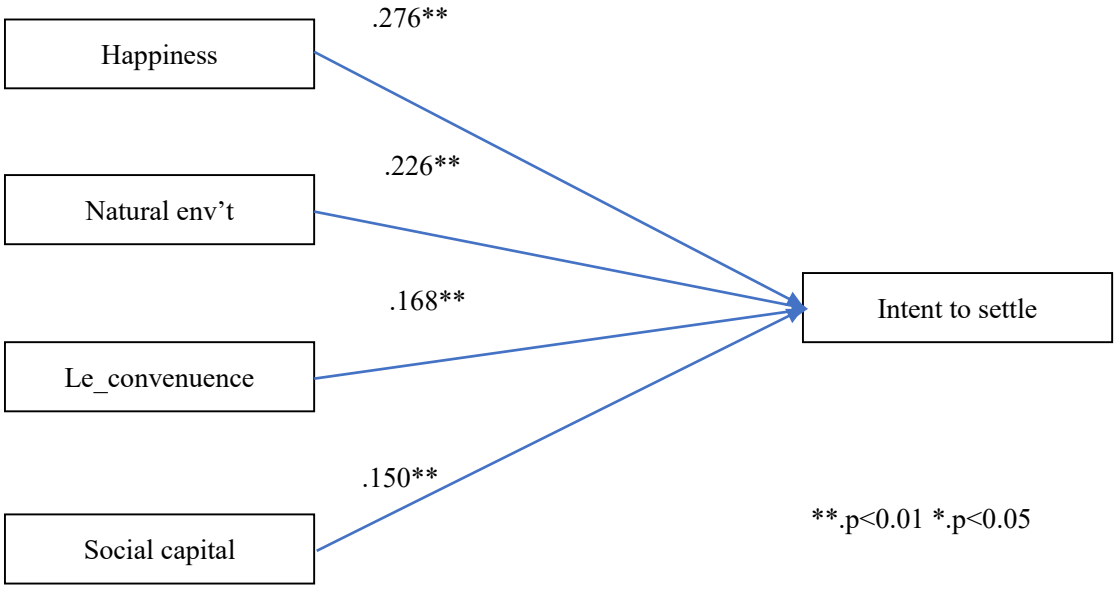


図２　定住意向に与える規定要因[11]

第3章　本研究の位置づけ

「地域愛着」は協力行動を促すこと等，地域とのかかわりを高めるために効果的である．したがって，「定住意識」も同じように「地域愛着」が醸成されれば，今後の地域との関係性を強める一つとして，地域に対して「住みたい」や「関わり続けたい」といった意思，外部に出たとしても関わり続けたいという意思を醸成することができるのではないかと解釈できる．ただ「定住意識」との繋がりに関しては，地域やそこに関わる人々への思いというのも規定要因として挙げられている中で，「地域愛着」という指標から高校生の「定住意識」を醸成することが本当にできるのか，その繋がりを示したデータが少ない．

また，高校生の定住意識を高めるであろう「地域愛着」を醸成するために，地域資源に触れることや市民活動の活性化が必要になることや年代，居住年数等について書かれた既存研究や報告は存在しても，高校生に着目した「地域愛着」の醸成するための規定要因を示した論文も少なく，効果的な地域資源の触れ合い方でそれらを醸成できるのかを示された論文が少ない．

本研究では，定住・離脱の転機となる「高校生」に対して，高校卒業後も地域との関わりを強めてもらう一つの要素となる「定住意識」を醸成するために，高校生に対して「地域資源接触と地域愛着からみた高校生の定住意識醸成の関係性」を明確にする．そうすることで，市や地元の人々が，今後高校生に対する効果的なアプローチの仕方や施策提案を始め，若者に魅力的なまちづくりの一環とした基礎的研究の一つとして，本研究の位置づけとする．

第 4 章　本研究で検証する仮説

4.1 本研究の仮説

地域愛着が高い人ほど地域に対して協力的な行動をとるということから，定住意識に関しても地域愛着が高まれば，そういった意思を醸成できるのはないかと考えられる．ただ，定住意識「定住」と定住意識「外部関係」の醸成では必ずしも同じ想いを持っているとは限らないと考えられる．その点も踏まえて，以下のように仮説を設けた．

仮説① 地域愛着(選好/感情/持続願望) が強まれば，高校生の定住意識を醸成することができる， 仮説② 定住意識「定住」と定住意識「外部関係」の醸成では，地域に対する願いや永続願望の尺度である地域愛着(持続願望)の影響度に違いが生まれる．

また，地域愛着が定住意識醸成に効果的であるのならば，高校生の地域愛着を醸成する効果的な触れ合いやアプローチする時期があると想定される．

仮説③ 地域愛着(選好/心情/願望)を醸成する，高校生(若者)ならではの効果的な地域資源の触れ合い方がある．

最後に，堤の研究では，地域に対して協力行動をとる人は，地域資源接触による直接効果があることが示唆されている．このことから，地域資源接触量を増やせば定住意識醸成につなげることができる直接効果が存在すると考えられる．ただ，地域愛着の既存研究のように，様々な協力的行動を地域愛着は促していることがわかるので，定住意識も同様に，地域愛着を介した間接効果の方が，プロセスとしてはより効果的であると考えられるため，以下のように仮説を設けた．

仮説④ 地域資源接触から定住意識醸成への直接効果より，地域愛着を介した定住意識醸成への間接効果の方が，影響度が高くなる．

本研究の仮説を立証できるかどうかは，仮説で示した関係性が“統計的に示唆される”ことで立証できたとする．

4.2 本研究での各要素の定義

本研究で扱う各要素(地域愛着/定住意識)について，上記の既存の仮説の内容を考慮したうえで，以下のように定義する．

・地域愛着

Hidalgo et al.[12]が定義しているものと，本研究の解釈とを合わせて「地域愛着」を「人と特定の地域をつなぐ感情的な絆や結びつきであり，心地よいものとして感じられるもの」と定義する．また，地域愛着の尺度として既存研究を参考に，それぞれ地域愛着(選好)・地域愛着(感情)・地域愛着(持続願望)と言い換えて用いる．地域愛着(選好)は個人的な嗜好の観点から当該地域を肯定的に評価する程度を意味するものであり，地域愛着(感情)は，そうした嗜好を超えて当該地域に対して，慣れ親しんだものに深く惹かれ，離れ難く感じる程度を意味するものとする.地域愛着(持続願望)とは，嗜好や感情といった現状の地域に対する認知的，情緒的な地域への心的関与のみを意味するのではなく，地域のあり方そのものに対して“願い”を抱くという地域愛着を意味するものとする[8].

また，ここでいう「地域」の定義として，行政政策の基本的な範囲である基礎自治体範囲の地域とする．

・定住意識

武ら[13,14]の研究から「定住」の狭義として，同一場所に物理的に永年にわたって住み続けること，あるいは満足して，愛着性や連帯性を持ちつつ，短くないある一定の期間，継続して住むこと．人は環境に対して 1 定住したい，2 移動(移住)したい，3 住み良く(するため改善)したいという対応の仕方があり，1 は「住居」及び「周辺領域」である「地域」に対して， 満足感を持ち，半永久的に「定住」しようとする意思を持った状態と挙げている．この武らの既存研究の定住意識に対する定義に加え，本研究では移住したとしても，地域イベントには参加する，市が災害にあったら支援したい等，地域との外部からの関わりの意識も含める．つまり，本研究の「地域」の定義に変えた上で定住意識を広義の意味として，行政政策の基本的な範囲である，基礎自治体範囲と定義する「地域」に対して，満足感を持ち，半永久的に「定住」や「外部からの関係」を持ちつづけようとする意思と定義づける.そこで，この定義をもとに定住意識を定住意識(定住)と定住意識(外部関係)として，本研究では研究を進める．

第5章　研究方法

5.1 研究方法

第 4 章で示した仮説を立証するために，本研究の研究方法として，アンケートを用いてその結果を元に，分析をすることで地域資源接触と高校生が抱く地域愛着と定住意識の関係性を明確にする．

⑴　高校生を対象としたアンケート調査

事前にアンケートを作成し，担任の先生宛てと学生向けの説明用紙を添えて，福井県立大野高等学校，福井県立奥越明成高等学校の２校にアンケートを郵送した．各高校では，担任の先生からアンケートを配布してもらい，宿題として持って帰って回答する，もしくは学校の時間の中で回答してもらう方法でアンケートを実施した．

⑵　アンケート結果の分析

まず，現段階の状況を把握するために，現在考えられる住む予定及び定住意識(定住/外部関係)，地域資源とのかかわりの単純集計を行う．

そのうえで，地域資源接触・地域愛着・定住意識の関係性をみるために，

相関分析：各項目の相関関係を見る

重回帰分析：個々の要素と定住意識との相関を知る

共分散構造分析：各関係性の因果関係を明らかにしモデル化する

をそれぞれ行う．

⑶　大野市への提案

定住意識(定住)・定住意識(外部関係)に分けて,地域資源接触から地域愛着を介した定住意識の醸成をはじめ，地域資源接触・若者の地域愛着・定住意識の関係性のモデル図の作成および定住意識を醸成する為の特徴を示唆することで，高校卒業後の今後の地域とのかかわりを強めるために，高校生の定住意識を始め，地域愛着を醸成するにはどのようなアプローチが必要かを提案する．

5.2 アンケート概要

福井県大野市にある，福井県立大野高校と福井県立奥越明成高校の高校２年生を対象にアンケートを実施した．調査項目として，　①基本項目　②定住意識に関して　③大野市への”想い”について　④地域資源との関わりについて　4 つに大きく質問項目を分類し，アンケート原案を作成した．各項目の調査内容を以下にまとめる．

① 基本項目

アンケート回答者の基本的なデータを集めるために，性別/お住まいの町目について回答を求めた．

② 定住意識に関して

まず，現段階で高校卒業後の住む予定の場所を聞き，現状を理解したうえで，地域資源接触と若者の地域愛着と定住意識の関係性を分析するために，高校卒業後や大学・短大・専門学校等卒業後も地元に住み続けたいか，最も合うもの一つを選んでもらい，定住意識に関する質問を設けた．なお，本研究の定住意識の定義として「外部関係」を用いている．地域イベントには参加したい，市から何か頼まれると手伝いたい，市が災害にあったら支援したいなど，外部に出たとしても関係を持ちつづけたいか否かも含めるため，「とてもそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「そう思わない」「全然そう思わない」の 5 段階で外部からの関係をもち続けたいか回答を求めた．

③ 大野市への”想い”について

大野市の高校生が大野市に対して，どれだけ地域愛着があるのか．また地域愛着が高校生の定住意識の醸成につながるのか，そして地域愛着を醸成するための効果的な地域資源の触れ合い方を明確にするために，藤井らの論文で用いている質問項目を使用する.ただ，地域愛着(感情)にある，「ずっと住み続けたい」という項目は，本研究の「定住意識」の定義から，②の「定住意識に関して」の質問項目に含めているので，③の質問項目から除くことにした．本研究では「地域愛着」を 3 要素に分類し，「とてもそう思う」から「全然そう思わない」の 5 段階での回答を求めた．

④ 地域資源との関わりについて

地域愛着，そして定住意識が醸成される効果的な地域資源接触があるという仮説の背景を明確にとらえるために，堤の研究の質問項目を使用し，まず，大野市にある地域資源を「建造物」「自然」「コミュニティ」の 3 種類に分類し，それぞれ分野において 4 つもしくは 5 つの地域資源を挙げた．また今回，高校生にとっての資源「そば・里芋など」に変更し，かつコミュニティに関しては高校生特有の地域資源「高校生議会」を加えたうえで，回答者にとって最も関わりのあるものを回答してもらった．

次に，その地域資源との接触のシチュエーションを高校生ならではのものに変え，”友達とよく遊んだ思い出のある場所である”のように「学生生活」で関わる場合，”家族や近所の人とよくその資源の話をする”のように「日常生活」で関わる場合，”授業や進路指導等で資源について調べたことがある”のような「地域教育」で関わる場合，最後に”この地域資源に関するイベントによく参加する”のような「イベント」の中で関わる場合の 4 つのパターンに分類し，これらの質問に対して，「とてもそう思う」から「全然そう思わない」の 5 段階での回答を求めた.また，どの時期にアプローチすることが効果的かを明確にするために，地域資源と最もかかわった時期「幼少期」「小学生の時期」「中学生の時期」「高校生になってから」の最も合うものに一つマークしてもらうことにした．

5.3 アンケートの質問内容

5.3.1 「②定住意識に関して」の質問内容

1-1) 高校卒業後の現段階の住む予定の場所について

(大野市内に住む/大野市外の福井県内に住む/福井県外の北陸地方に住む/それ以外の地域に住む(関西・関東等))の中で，該当するもの一つ.

1-2) 進学先や就職先等は考えないうえで，高校卒業後や大学・短大・専門学校等を卒業後も，大野市に住みたいと思うかについて

(大野市内に住みたい/何年か市外に住んだら，その後大野市に住みたい/福井県内のどこかで住みたい/福井県外のどこかで住みたい)の中で，該当するもの一つ.

1-3) 1-2)の質問で，一時的にもしくは外部に出たいと回答した人で，大野市外に住んでいる間も大野市と関わり続けたいと思うか(地域イベントには参加したい・市から何か頼まれると手伝いたい・市が災害にあったら支援したい等)について

(とてもそう思う/そう思う/どちらでもない/そう思わない/全然そう思わない)で，該当するもの.

5.3.2 「③大野市への”想い”について」の質問内容

1-1)地域愛着について

地域愛着(選好):住みやすいと思う/お気に入りの場所がある/市内を歩くのは気持ちよい/雰囲気や土地柄が気に入っている/大野市が好きだ/リラックスできる

地域愛着(感情):大切だと思う/愛着を感じている/自分の居場所があると感じる/自分の“まち”だという感じがする/

地域愛着(持続願望):いつまでも変わってほしくないものがある/無くなってしまうと悲しいものがある

5.3.3 「④地域資源との関わりについて」の質問内容

1.地域資源(建造物)

1-1)以下の歴史，文化，伝統に関する建造物「大野城/寺町通り・朝市通り/武家屋敷旧内山家・武家屋敷旧田村家/宝慶寺・黒谷観音/百間堀・笛資料館・大野市歴史博物館」のうち，最も関わりが深いと感じるもの

1-2) 1-1)で選択した地域資源との関わりについて

「学生生活」の中での関わり:友人とよく遊んだ思い出のある場所である/学校行事や課外活動で訪れたことがある(遠足など)/通学等で普段からよく目にする

「日常生活」を通しての関わり:家族や近所の人とよくその資源の話をする/生活の中で訪れたことがある(散歩等)/観光客やマスコミ，ネット等で良い評判を聞くと嬉しく思う

「地域教育」の中での関わり:授業や進路指導等で資源について調べたことがある/学校以外で資源について考える機会があった/学校等で学ぶことはその地域資源に対して考えるいい機会となる/市にこの地域資源があることを誇りに思う

「イベント」の中での関わり: この地域資源に関わるイベントによく参加する/この地域資源に関わるイベントに積極的に参加したいと思う/この地域資源を守っていく活動への協力は厭わない

2.地域資源(自然)

2-1)以下の自然環境，食，地場産品「清水(湧水)/九頭竜湖/荒島岳/そば・里芋など」のうち，最も関わりが深いと感じるもの

2-2) 2-1)で選択した地域資源との関わりについて

「学生生活」の中での関わり:友人とよく訪れたり，食べたり飲んだりする機会があった/学校行事や課外活動で訪れたり，食べたり飲んだりする機会があった/通学等で普段からよく目にする

「日常生活」を通しての関わり:家族や近所の人とよくその資源の話をする/生活の中で目

にしたり触れ合ったりすることがある(散歩・食事・ネット等)/美しい　素晴らしいと思う/観光客やマスコミ，ネット等で良い評判を聞くと嬉しく思う

「地域教育」の中での関わり:授業や進路指導等で資源について調べたことがある/学校以外で資源について考える機会があった/学校等で学ぶことはその地域資源に対して考えるいい機会となる/市にこの地域資源があることを誇りに思う

「イベント」の中での関わり: この地域資源に関わるイベントによく参加する/この地域資源に関わるイベントに積極的に参加したいと思う/この地域資源を守っていく活動への協力は厭わない

3.地域資源(コミュニティ)

3-1)以下の人とのコミュニティ「大野市で開催される祭り/大野市ポスター展・大野大人図鑑/広報おおの/人力車(越前こぶし組)/高校生議会」のうち，最も関わりが深いと感じるもの

3-2) 3-1)で選択した地域資源との関わりについて

「学生生活」の中での関わり:友人とよく参加・体験した思い出のある場所である/学校行事や課外活動で訪れたことがある/通学等で普段からよく目にする

「日常生活」を通しての関わり:家族や近所の人とよくその資源の話をする/観光客やマスコミ，ネット等で良い評判を聞くと嬉しく思う/日常生活で人と触れ合う機会が増える/近所や市内での人とのつながりが強まる

「地域教育」の中での関わり:授業や進路指導等で資源について調べたことがある/学校以外で資源について考える機会があった/学校等で学ぶことはその地域資源に対して考えるいい機会となる/市にこの地域資源があることを誇りに思う

「イベント」の中での関わり: この地域資源に関わるイベントによく参加する/この地域資源に関わるイベントに積極的に参加したいと思う/この資源の実施や参加は地域資源に対して考えるいい機会となっている/この地域資源を守っていく活動への協力は厭わない/年代を超えたつながりが強まる(大野へかえろうプロジェクト)

4.その地域資源と最もかかわった時期について

幼少期/小学生の時期/中学生の時期/高校生になってから

第6章　アンケートの分析結果

6.1 アンケートの基本集計結果

6.1.1 アンケート概要

表１　アンケート概要

研究対象	各高校の大野市出身の高校２年生 ・福井県立大野高等学校 ・福井県立奥越明成高等学校
実施期間	2020 年 10 月 29 日～2020 年 11 月 6 日
総配布数	211
サンプル数	207(回答率 98.10%)
有効回答数	193(有効回答率 93.24%)
性別(有効回答数から)	男性 99 名　女性 93 名 (無回答 1)

今回，福井県大野市にある福井県立大野高等学校および福井県立奥越明成高等学校の大野市出身の高校 2 年生を対象として，各高校に郵送配布・回収によるアンケート調査を行った．各高校では，担任の先生からアンケートを配布してもらい，宿題として持って帰って回答するもしくは，学校の時間の中で回答してもらう方法でアンケートを実施した．調査期間は 2020 年 10 月 29 日から 2020 年 11 月 6 日とし，総配布数は 211 通であり，各高校の対象人数に分けてアンケートを配布した．結果，サンプル数は 207 であり回答率 98%であった．また，有効回答数を集計してみると男 99 人，女 93 人(無回答:1)の計 193 もの数があり，有効回答率は 93%と高い回収率とすることができた．

6.1.2 現段階の住む予定の集計結果

次に，本研究の仮説を検証する前に現段階における高校卒業後の住む予定を把握し，属性を確認するために集計を行った．その結果が図 5 である．各高校生の現状として，大野市内に住む予定の人は奥越明成高校では約半数(52%)を占め，大野高校に関しては，約 3 割ほどであった．大野高校と違って奥越明成高校は総合産業高校である．その特徴が影響し，専門性を高め，活かすことができる市内の就職先を検討予定の人が多い傾向が見てとれる．大野高校に関しては，大野市外に出る予定の人が半数以上を占めていることから，大野市においては，多くの高校生が大野市を離れる予定であることが分かった．

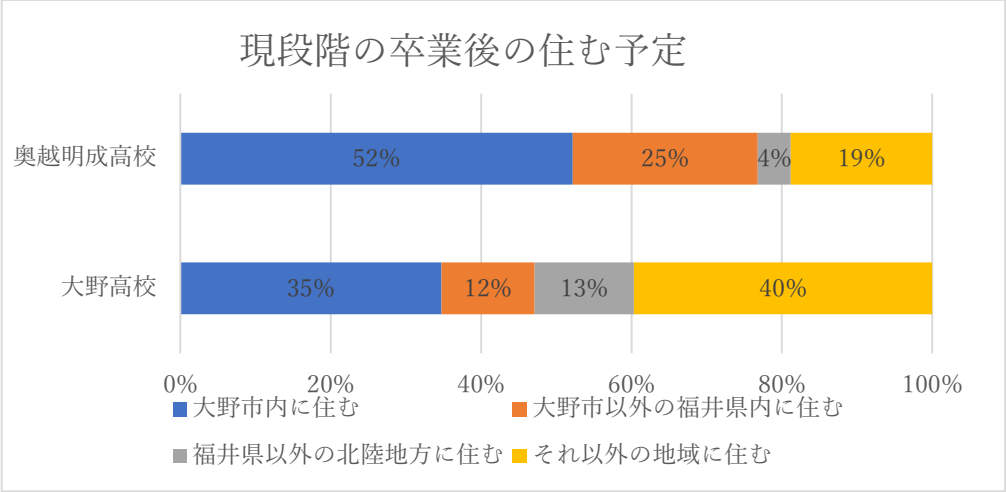


図 5 現状の高校生の卒業後の住む予定

また，定住意識「定住」とのクロス集計結果を図 6 に示す．この結果からは大野市内に住む人ほど「福井県外のどこかで住みたい」と感じている．このことから，定住意識「定住」を上回るほど，進学先や雇用先が現状においても大きく影響していることがわかる．ただ少数ではあるが，①大野市内に住む予定の人ほど，「大野市内に住みたい」と感じている人は増えていることから，定住意識も少なからず影響していること．また，②それ以外の地域に住む予定の人ほど「大野市に住みたい」と感じている人が多くなっていることから，この①，②のような高校生が増えてくれることが望まれる．実際，そのような可能性は現段階においても確認できる．

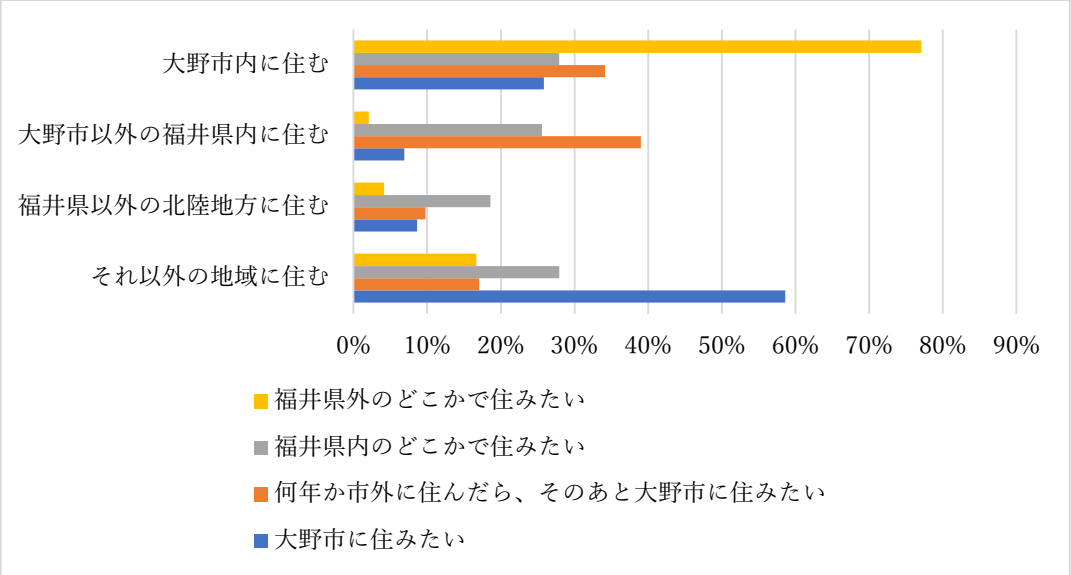


図 6　住む予定と定住意識「定住」の関係性

6.1.3 現段階の定住意識の単純集計結果

現段階における高校２年生の定住意識「定住」/「外部関係」の意識を，帰無仮説を「比率が等しい」とし，有意水準 10%の比率の差の検定を検証したうえで，現状を解釈する．

1. 定住意識「定住」に関して

「定住」に関しては，各高校も約半数に分かれて，大野市に住みたい(最終的には)人と外部に出たいと感じている．高校別でみれば，「大野市に住みたい」という部分は，比率の差の検定から棄却されるため，奥越明成高校の学生のほうが割合としては多いと解釈できる．

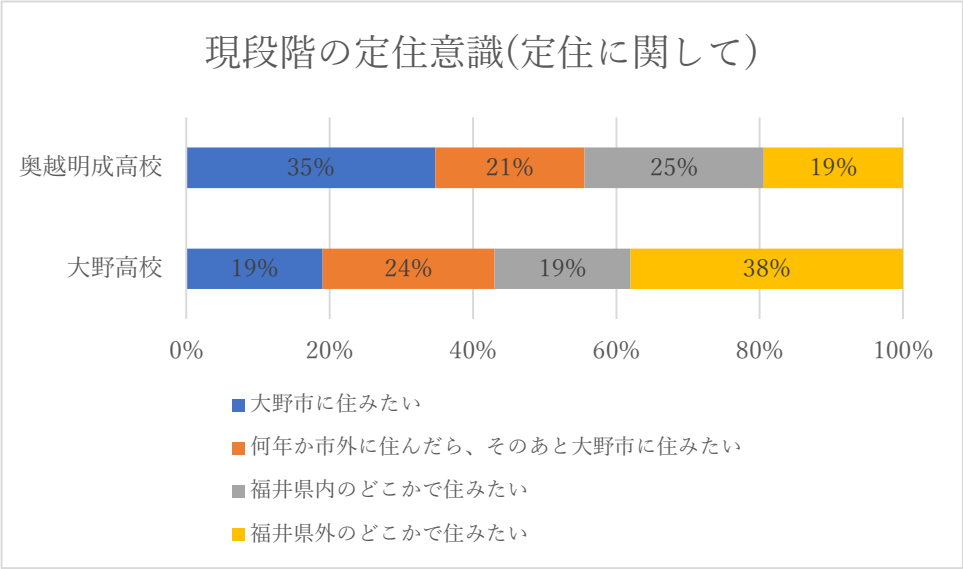


図 7 現状の高校生の定住意識「定住」

2. 定住意識「外部関係」に関して

定住意識「定住」の大野高校の学生は，半数以上の人が外部に出たいという人であったが，定住意識「外部関係」では，外部からの関係を持ち続けたいと感じている割合は多くなっている．奥越明成高校は定住意識「定住」と定住意識「外部関係」ではほとんど変化はなく，両校の定住意識「外部関係」の意識の差として，比率の差の検定から差はなしと判断された．つまりは，定住意識「定住」より定住意識「外部関係」のほうが，醸成しやすいのではないかと解釈できる．

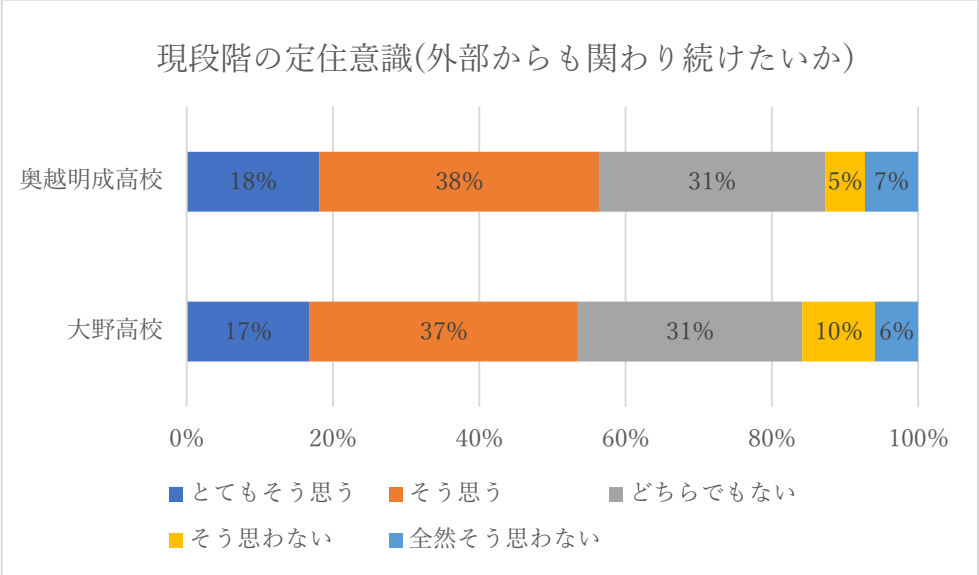


図 8 現状の高校生の定住意識「外部関係」

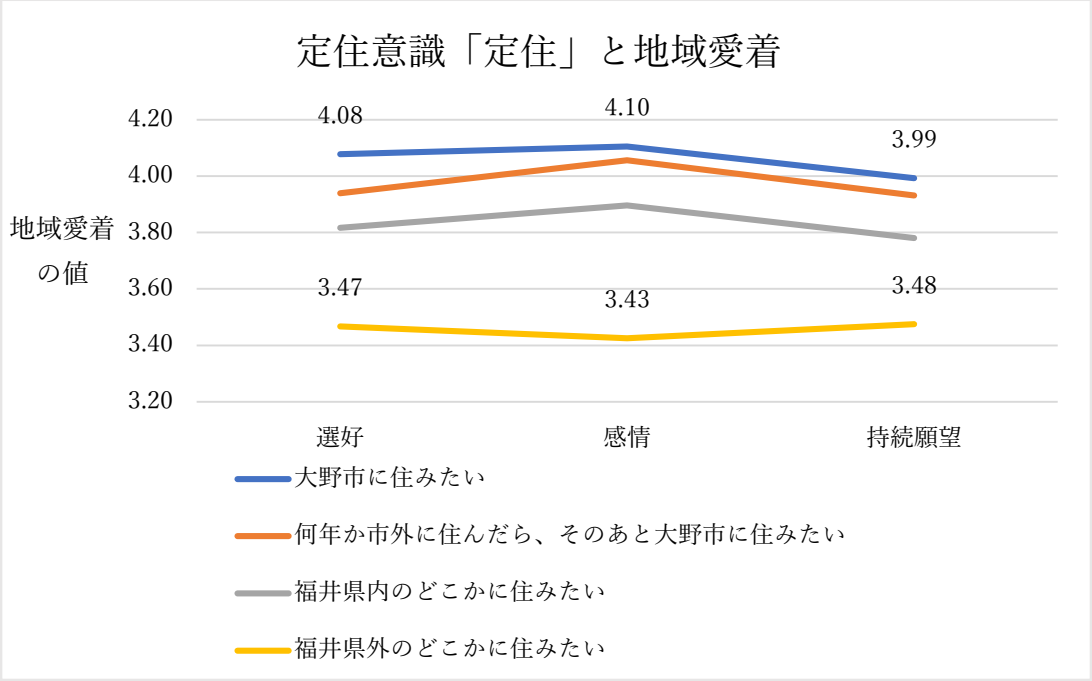
これら上記の高校生の現状を把握したうえで，以下より仮説を検証するための分析結果を述べていく．

6.2 定住意識と地域愛着の関係性分析

地域愛着が高まれば定住意識も高まるのか，定住意識「定住」と定住意識「外部関係」では地域愛着「持続願望」の影響に差が生まれるのかという仮説を検証するために，まず，以下のように計算を行った．

・定住意識「定住」
大野市に住みたい=4/何年か市外に住んだら，そのあと大野市に住みたい＝3/福井県内のどこかに住みたい＝2/福井県外のどこかに住みたい＝1　と 4 段階に重み付け．
・定住意識「外部関係」
とてもそう思う=5/そう思う＝4/どちらでもない＝3/そう思わない＝2/全然そう思わない=1 の 5 件法．
・地域愛着
各項目とてもそう思う～全然そう思わないの 5 件法を用いて，「選好」「感情」「持続願望」の各平均値を算出した．

6.2.1 定住意識と地域愛着



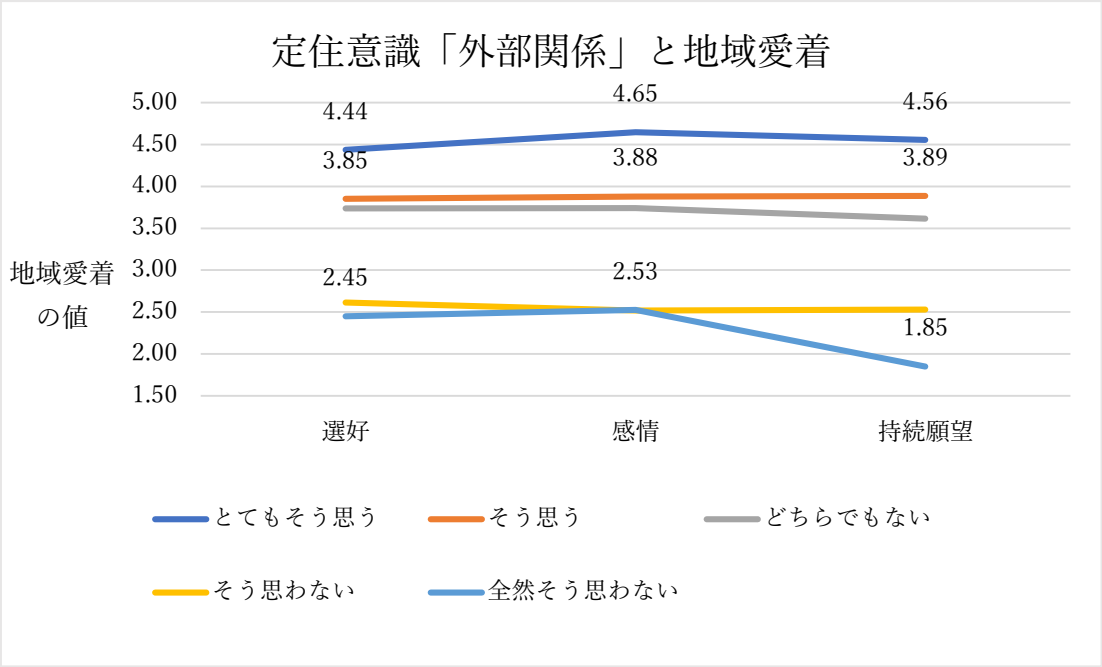


図 9 高校生の定住意識と地域愛着のクロス集計

まず，単純なクロス集計を行い，定住意識と地域愛着の関係性について分析を行った．その結果を図 9 に示す．

定住意識「定住」と定住意識「外部関係」どちらも地域愛着「選好」「感情」「持続願望」が高い人ほど，定住意識も高まっているということが分かった．また，有意水準 10%にて

差の検定を行ったうえで，定住意識「定住」の及び定住意識「外部関係」の意識が高い人において，地域愛着の各指標に違いがあるのかの分析した．地域愛着「選好」地域愛着「感情」地域愛着「持続願望」の差は，「差があるとは言えない」という帰無仮説は棄却されなかった．つまりは，定住意識が高い人は，地域愛着「選好」「感情」「持続願望」に偏りなく，地域愛着が高いということが分かった．地域において様々な願いや感情などを抱く高校生は，定住意識が高いということが言える．

また，比較的定住意識が高い人とそうでない人の地域愛着の差に着目してみると，地域愛着「感情」が共通して比較的差がみられる．地域に対して慣れ親しんだものに深く惹かれ，離れ難く感じる「感情」の程度が，定住意識「定住」と「外部関係」の醸成に大きな影響を与えているといえる．また，定住意識「定住」と定住意識「外部関係」の違う点として，地域愛着「持続願望」が定住意識「外部関係」では大きな差が生じた．大野市に住まなくとも外部から関係を持ち続けたいという思いがある人ほど，地域に対して“願い”が強いということがわかる．つまりは，定住意識「持続願望」に関して，地域愛着「持続願望」が，定住意識「外部関係」を醸成するための地域愛着「感情」に次ぐ要素であるといえる．

6.2.2 定住意識と地域愛着の重回帰分析とクロス集計

6.2.1 では，地域愛着が高いほど定住意識も高くなることが明らかとなった．次に，より詳しく特徴を捉えるために，クロス集計を行い定住意識が高い人とそうでない人の意識の差を把握するとともに，統計的に同じことが言えるのかどうかを重回帰分析の「変数減少法」を用いて，分析を行った．

1. 定住意識「定住」

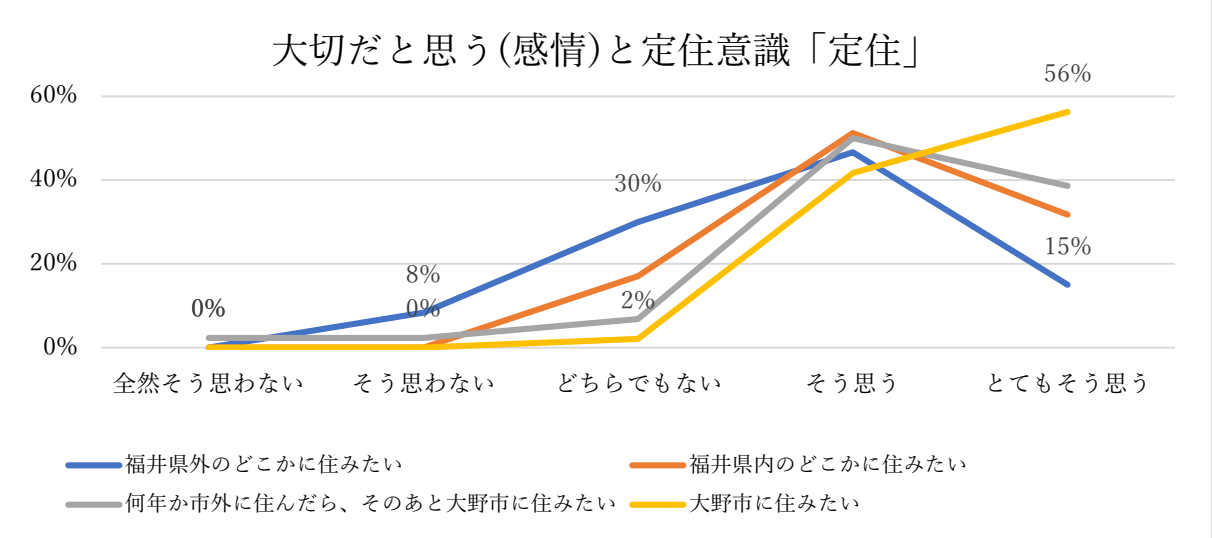


図 10 地域愛着の各質問項目と定住意識「定住」

表 2 地域愛着と定住意識「定住」の重回帰分析の結果

	地域愛着(選好)	**地域愛着(感情)**		
説明変数	大野市が好きだ	大切だと思う	自分の居場所がある気がする	切片
係数	0.353	0.372	0.297	-0.406
標準偏差	0.115	0.159	0.111	0.408
t 値	3.064	2.337	2.681	-0.996

図 10 から地域愛着「感情」の“大切だと思う”という質問項目では，定住意識「定住」が高い人(大野市に住みたい/何年か市外に住んだら，そのあと大野市に住みたい)とそうでない人(福井県内のどこかに住みたい/福井県外のどこかに住みたい)では，大きな意識の差が生まれた．このことから“大野市を大切だと思う”気持ちが強い人ほど，定住意識「定住」は高くなるということが示されている．また，図 10 と同様にほかの項目においてクロス集計を行った結果，“自分の居場所がある気がする”“大野市が好きだ”という項目が同じような結果が得られた．また，統計的に有意である項目は何かを判断するために，目的変数を定住意識「定住」，説明変数を地域愛着とし，変数減少法による重回帰分析を行ったところ，同じような結果を得ることができた，その結果を表 2 にまとめる．

6.2.1 では地域愛着「選好」で効果的な結果は得られなかったが，“大野市が好きだ”という「選好」の気持ちを抱く高校生は，定住意識「定住」を高めているという可能性が示唆された．以下のように“大切だと思う”“自分の居場所がある気がする”という地域愛着「感情」が最も影響することに次いで，“大野市が好きだ”という地域愛着「選好」を持つことが，定住意識「定住」の醸成のための必要になる点であるといえる．

2.　定住意識「外部関係」

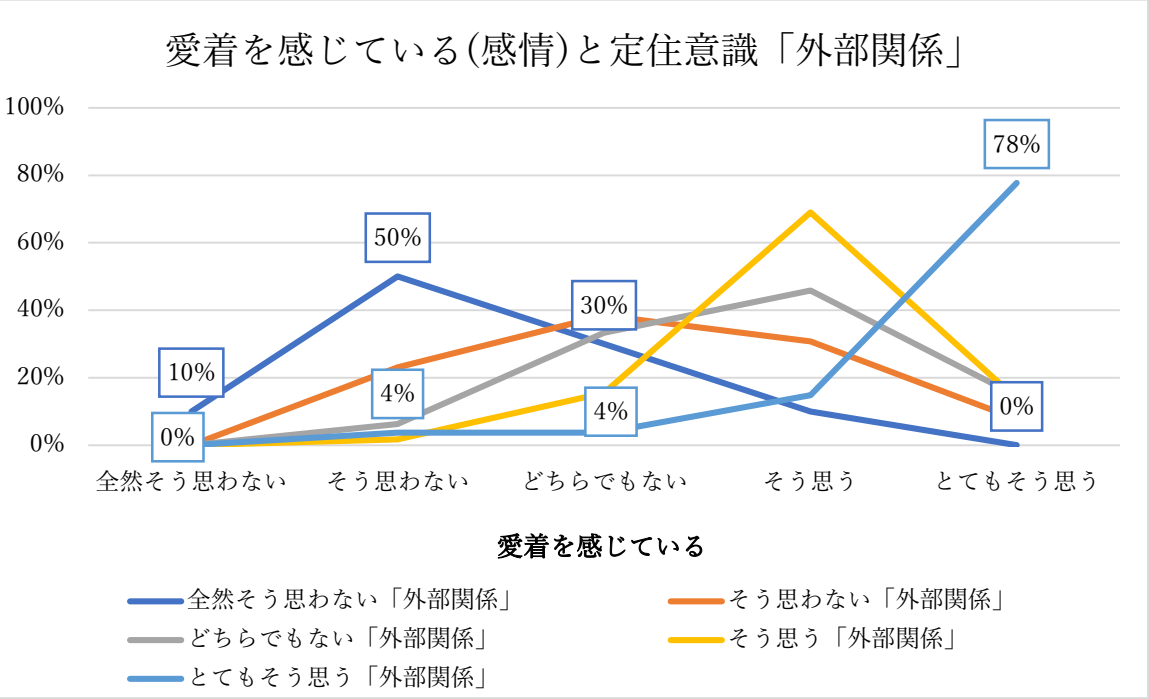


図 11 地域愛着の各質問項目と定住意識「外部関

表 3 地域愛着と定住意識「外部関係」の重回帰分析の結果

	地域愛着(持続願望)	**地域愛着(感情)**		
説明変数	いつまでも変わって ほしくないものがある	愛着を 感じている	自分の居場所が ある気がする	切片
係数	0.315	0.329	0.189	0.385
標準偏差	0.079	0.108	0.094	0.309
t 値	3.997	3.033	2.014	1.244

図 11 から地域愛着「感情」の“愛着を感じている”という質問項目では，定住意識「外部関係」が高い人(とてもそう思う/そう思う)とそうでない人(そう思わない/全然そう思わない)では，大きな意識の差が生まれた．このことから“愛着を感じている”気持ちが強い人ほど，定住意識「外部関係」は高くなるということが示されている．また，図 11 と同様にほかの項目においてクロス集計を行った結果,“自分の居場所がある気がする”“いつまでも変わってほしくないものがある”という項目が同じような結果が得られた．また，統計的に有意である項目は何かを判断するために，目的変数を定住意識「外部関係」，説明変数を地域愛着とし，変数減少法による重回帰分析を行ったところ，同じような結果を得ることができた，その結果を表 3 にまとめる． “愛着を感じている”“自分の居場所がある気がする”という地域愛着「感情」が最も影響することに次いで，“いつまでも変わってほしくないものがある”という地域愛着「持続願望」を持つことが，定住意識「外部関係」の醸成のための必要になる点であるといえる．また今回の分析結果からも，地域愛着「持続願望」が定住意識「外部関係」のみ，大きな影響を与えていることが統計的に有意になったことから，地域に対する「願い」というものは，外部に出たとしても持ち続けるものであって，それが地域とのかかわりを強くする可能性を秘めている．

6.2.3 地域愛着と定住意識の共分散構造分析

6.2.1 と 6.2.2 から地域愛着と定住意識「定住」と「外部関係」について分析をおこなった．これらの関係には地域愛着が高まれば，定住意識も高まる可能性が示唆された．ここでは，本研究の仮説について，共分散構造分析を用いてモデル化し，再度関係性を明らかにする．ただ，その前に，鈴木らの研究では地域愛着「選好」「感情」「持続願望」には“正の相関”があるということが分かっているので，本研究においても，地域愛着「選好」「感情」「持続願望」に“正の相関”が存在するならば，各地域愛着の尺度を介して，より多くの高校生の定住意識を醸成することができる可能性があることを想定し，地域愛着「選好」「感情」「持続願望」と定住意識「定住」と定住意識「外部関係」それぞれで相関分析をおこなった．有意水準 5%との片側検定を用いたうえで，相関分析の結果を以下の表 4 に示す

やはり既存研究通り，地域愛着「選好」「感情」「持続願望」の間には“正の相関”がみられた．この分析結果も踏まえたうえで，地域愛着と定住意識の関係性を共分散構造分析を用いて，モデル化する．

表４　定住意識と地域愛着間の相関分析結果

	定住意識 (定住)	選好	感情	持続願望
定住意識(定住)	-	r=0.371 p=0.000	r=0.411 p=0.000	r=0.269 p=0.000
選好	-	-	r=0.788 p=0.000	r=0.698 p=0.000
感情	-	-	-	r=0.684 p=0.000
持続願望	-	-	-	-

r=相関係数
p＝p 値(p＜0.05 片側)
n=193

	定住意識 (外部関係)	選好	感情	持続願望
定住意識 (外部関係)	-	r=0.572 p=0.000	r=0.617 p=0.000	r=0.560 p=0.000
選好	-	-	r=0.791 p=0.000	r=0.721 p=0.000
感情	-	-	-	r=715 p=0.000
持続願望	-	-	-	-

r=相関係数
p＝p 値(p＜0.05 片側)
n=156

その共分散構造分析の結果が以下の図 12，13 である．分析にあたっては，有意水準 10%で統計的に有意であると判断されたパスを示し，誤差項を省略した．パスに記載している数値に関しては，上段が標準化係数，下段は t 値を示す．また t 値に関しては，***が 1%，**が 5%，*が 10%の有意水準をそれぞれ示している．

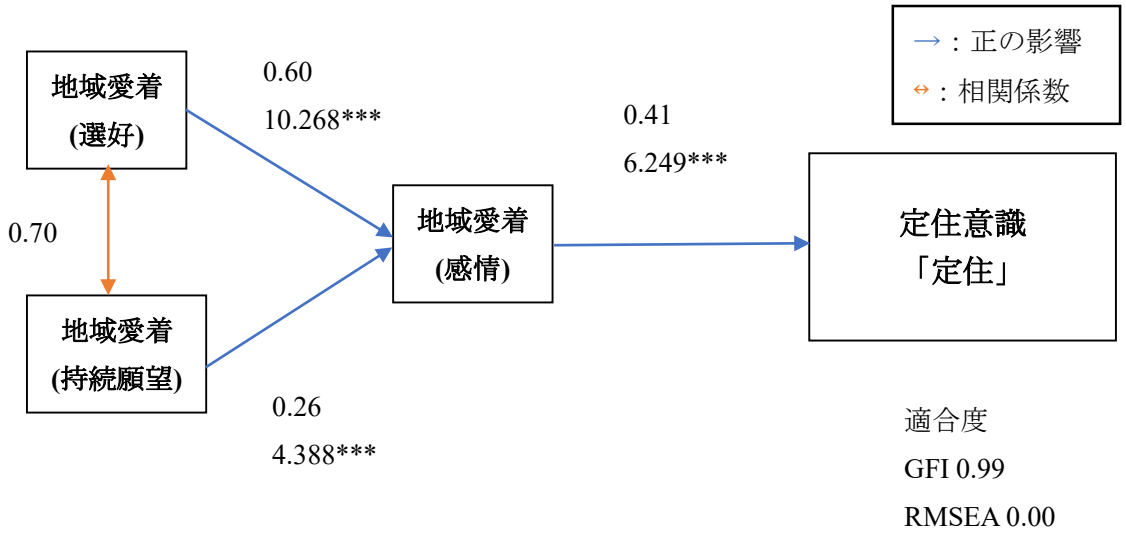


図 12 地域愛着と定住意識「定住」醸成のモデル図

図 12 に関して，定住意識「定住」に最も影響しているのは，地域に対して慣れ親しみ，離れ難く感じる地域愛着「感情」であることがこの結果からもわかる．つまり，地域に対して親しさを感じる度合いを強めることが，高校生の住みたいといった意思を高める傾向がある．しかし，6.2.2 で得られた重回帰分析の結果では，地域愛着「選好」も影響している可能性がみられたが，共分散構造分析を用いたモデル図では，直接的な地域愛着「選好」から定住意識「定住」とのパスは統計的に有意ではなかった．つまり，単純に大野市が好きだという地域愛着「選好」を持ち，定住意識「定住」を高く持つ高校生は，図 12 から地域愛着「感情」という地域に対する親しさも感じることで，定住意識「定住」を高めている可能性があると解釈できる．同じように地域愛着間には有意なパスが存在するため，最終的には地域愛着「感情」を介して，より多くの高校生の定住意識「定住」を高める可能性が示唆されている．また，適合度指標 GFI(Goodness of Fit Index)も，無駄な複雑さがないかどうかを表す適合度係数 RMSEA(root mean square error of approximation)ともに有効な数値が得られた．

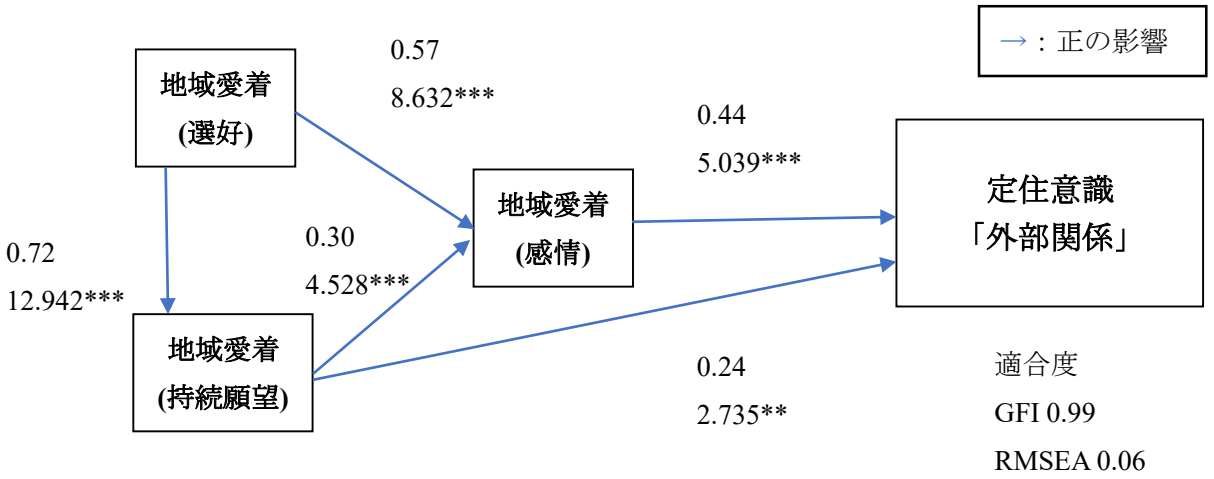


図 13 地域愛着と定住意識「外部関係」醸成のモデル

図 13 に関して，定住意識「外部関係」に最も影響しているのは，地域愛着「感情」に次いで地域愛着「持続願望」であることがこの結果からもわかる．また，図 12 と同じように地域愛着間には有意なパスが存在するため，より多くの高校生の定住意識「外部関係」を醸成できる可能性が示唆された．また，定住意識「定住」と大きな違いは，地域愛着「持続願望」が直接定住意識「外部関係」に影響するということである．外部へと出る若者が多い地方の市町村において，地元以外にいたとしてもかかわりを持ち続けてもらうには，地域に対して慣れ親しんだものに深く惹かれる想い等の親しさの度合いや，地元に対する“願い”というものを醸成する必要があるといえる．モデルの適合度においては，GFI は 1 に近い数値となったが，RMSEA が 0.05 以下なら当てはまりが良く，0.1 以上であればモデルの当てはまりが悪いと一般的に言われている中で，0.06 という数値となった．ただ，0.05 に近しい値が得られたため，この仮説のモデル図も比較的適合度が高いモデルであると解釈できる．

これまでの 6.2 の結果から，高校生の地域愛着を高めることができれば，卒業後の地域とのかかわりを強める，定住意識「定住」と定住意識「外部関係」を醸成することができる可能性が示唆された．次に，より多くの高校生に定住意識を高めてもらうために，規定要因となった若者の地域愛着を醸成する，効果的な地域資源との接触が存在するのかについて，分析をおこなう．

6.3 地域愛着と地域資源接触との関係性分析

6.3.1 地域資源接触の単純集計結果

まず，現段階の大野市出身の高校生が感じる大野市の地域資源および，その接触のシチュエーションについて集計をおこなった．

表 5 地域資源接触の単純集計結果

建造物(計191人)	選んだ人数	割合	接触度合い	学生生活	日常生活	地域教育	イベント
大野城	142	74%		3.70	3.22	3.53	2.99
寺町通り・七間朝市通り	38	20%		3.31	3.29	3.45	2.98
武家屋敷	1	1%		3.30	3.30	3.50	3.70
宝慶寺・黒谷観音	9	5%		2.52	3.22	3.28	2.74
百間掘・笛資料館	1	1%		3.00	2.00	2.00	2.00
自然(計192人)	選んだ人数	割合	接触度合い	学生生活	日常生活	地域教育	イベント
清水	113	59%		3.64	3.63	3.65	3.10
九頭竜湖	4	2%		2.83	4.31	3.75	3.83
荒島岳	9	5%		2.63	3.50	3.06	2.37
そば・里芋など	66	34%		3.07	3.65	3.50	2.79
コミュニティ(計191人)	選んだ人数	割合	接触度合い	学生生活	日常生活	地域教育	イベント
祭り	174	91%		3.32	3.47	3.20	3.46
大野市ポスター展等	0	0%		0	0	0	0
広報おおの	11	6%		2.45	3.27	3.02	3.07
人力車	3	2%		3.10	3.17	3.27	3.33
高校生議会	3	2%		3.43	4.10	3.77	3.00

地域資源(建造物)について，約 7 割の人が「大野城」を地域資源(建造物)として感じている．またシチュエーションについては，建造物の種類によって地域教育や学生生活など様々なシチュエーションで触れ合う機会が多いと読み取ることができる．

次に，地域資源(自然)については「清水」と回答している高校生が半数を占め，「そば・里芋など」も約 3 割の高校生が選択している．シチュエーションに関しては，「清水」に関しては地域教育で，それ以外の自然の種類は，日常生活での触れ合いが多いとわかる．

最後に地域資源(コミュニティ)に関して，ほとんどの高校生が「祭り」を地域資源(コミュニティ)として感じている．シチュエーションも，人力車のイベントで触れ合うこと以外，日常生活で触れ合うことが比較的多いことがわかる．

上記の結果はあくまでも単純集計であり，地域愛着を醸成する効果的な触れ合い方であるのかどうかは判断できない．よって，地域愛着との関係性の分析結果を以下に述べ，効果的なシチュエーションを明らかにする．

6.3.2 地域愛着が高い高校生とそうでない高校生の特徴

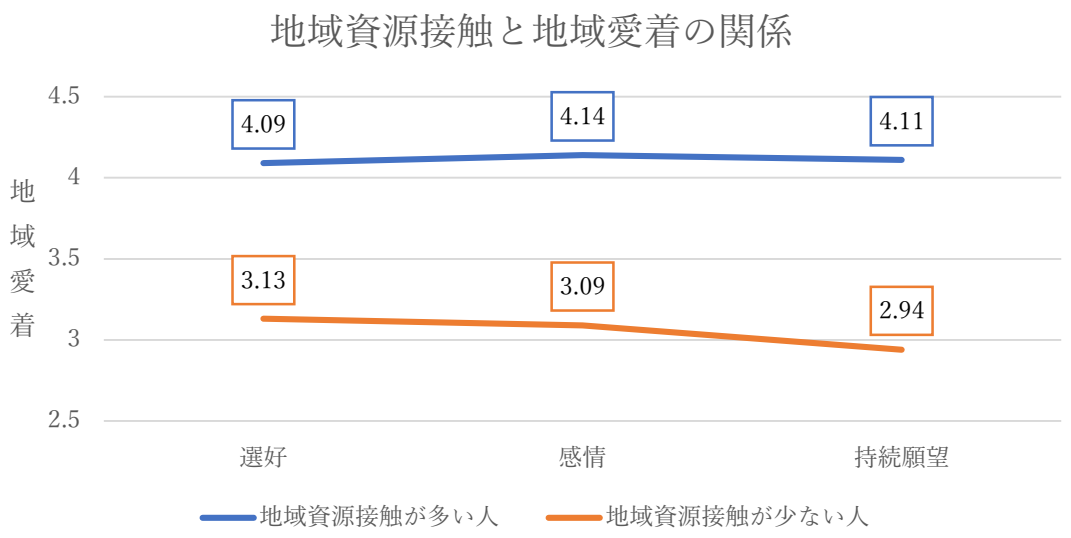


図 14 地域愛着が高い高校生とそうでない高校生の特徴

図 14 から，地域愛着が高い高校生は地域資源との接触が多く，地域愛着が低い高校生に関しては，地域資源との接触が低いことがわかる．つまりは，地域に存在する「建造物/自然/コミュニティ」の地域資源との接触を増やせば，高校生の地域愛着を醸成することができる．地域愛着が高い高校生に関して，有意水準 10%で平均値の差の検定を行ったうえで，地域愛着(選好/感情/持続願望)に違いはみられなかった．ただ地域愛着が低い高校生との差として，

地域愛着(持続願望)：1.17，地域愛着(感情)：1.05，　地域愛着(選好)：0.96

という結果から，1 を超える地域に対して親しさを感じる度合い地域愛着(感情)や，地域に対する願いの度合い地域愛着(持続願望)が，地域資源との接触量で特に影響する地域愛着であると解釈できる．鈴木らの既存研究では，「地域風土接触量」から地域愛着(選好)が特に醸成されると示唆されている．本研究では，「地域資源接触量」という項目を用いて，地域愛着との関係性を分析したが，上記のように違った結果が示唆された．ただ，地域愛着間の相関を無視した結果であるので，後に共分散構造分析を用いて，既存研究と違った結果が得られるのかを解釈する．

6.3.3 地域愛着を醸成する効果的なシチュエーション

6.3.2 では，地域資源との接触を増やせば高校生の地域愛着を醸成することができる可能性が示唆された．次に地域資源との接触の効果的なシチュエーションを明らかにすることで，より具体的なアプローチの仕方を提案する．以下，地域愛着の各指標を目的変数，地域資源との接触のシチュエーションを説明変数として，変数減少法による重回帰分析の結果を示す．

表 6 地域資源接触のシチュエーションと地域愛着との重回帰分析の結果

	地域愛着(選好)					
説明変数	学生生活(自然)	日常生活(自然)	日常生活(コミュニティ)			切片
係数	0.125	0.198	0.325			1.571
標準偏差	0.051	0.076	0.063			0.194
t 値	2.454	2.603	5.185			8.112
	地域愛着(感情)					
説明変数	地域教育(建造物)	イベント(建造物)	学生生活(自然)	日常生活(自然)	日常生活(コミュニティ)	切片
係数	0.203	-0.110	0.136	0.248	0.242	1.293
標準誤差	0.078	0.061	0.048	0.075	0.064	0.181
t 値	2.606	-1.796	2.865	3.321	3.775	7.163
	地域愛着(持続願望)					
説明変数	日常生活(建造物)	イベント(建造物)	日常生活(自然)	イベント(自然)	日常生活(コミュニティ)	切片
係数	0.159	-0.188	0.332	0.234	0.227	1.179
標準誤差	0.085	0.106	0.106	0.097	0.089	0.249
t 値	1.858	-1.786	3.143	2.399	2.552	4.744

表 6 から，係数に着目してみると，「日常生活」の中で地域資源と触れ合うことが，地域愛着を醸成する効果的なシチュエーションであるといえる．堤の研究では，「イベント」で触れ合うことが比較的地域愛着を醸成しやすくなるということが示唆されていたが，違った結果を得ることができた．堤の研究と大きな違いは「アンケートの対象年齢」である．比較的，「ご高齢の方」が堤の研究では回答していた一方，本研究では「高校生」である．つまりは若い人ほど，家族や近所の人と地域資源について話をすることや，ネットや散歩等でよく目にする等といった，身近に感じることができる「日常生活」の中で触れ合うことが，地域愛着の各指標を醸成するための効果的なシチュエーションであるといえる．

表 7 地域資源の種類と地域愛着との相関分析

地域資源との接触	地域愛着
地域資源（建造物）	r=0.630 p=0.000
地域資源（自然）	r=0.689 p=0.000
地域資源（コミュニティ）	r=0.688 p=0.000

次に地域資源を建造物/自然/コミュニティで分類し，高校生の地域愛着を醸成する効果的な地域資源の種類を把握するために，地域愛着との相関分析をおこなったところ表 7 の結果となった．この結果から“建造物”に分類される地域資源と触れ合うことよりも，飲食物や自然環境など“自然”に分類されるもの，祭りなどのコミュニティ”に分類される地域資源と触れ合うことが，比較的高校生の地域愛着を高めるのに効果的であるという結果が得られた．

6.3.4　地域資源と最もかかわった時期と地域愛着の関係

6.3.3 に加え，より具体的にアプローチをしていくために，どの時期に地域資源との接触，特に「日常生活」に近い取り組みを促すことが効果的か，その結果を以下に示す．

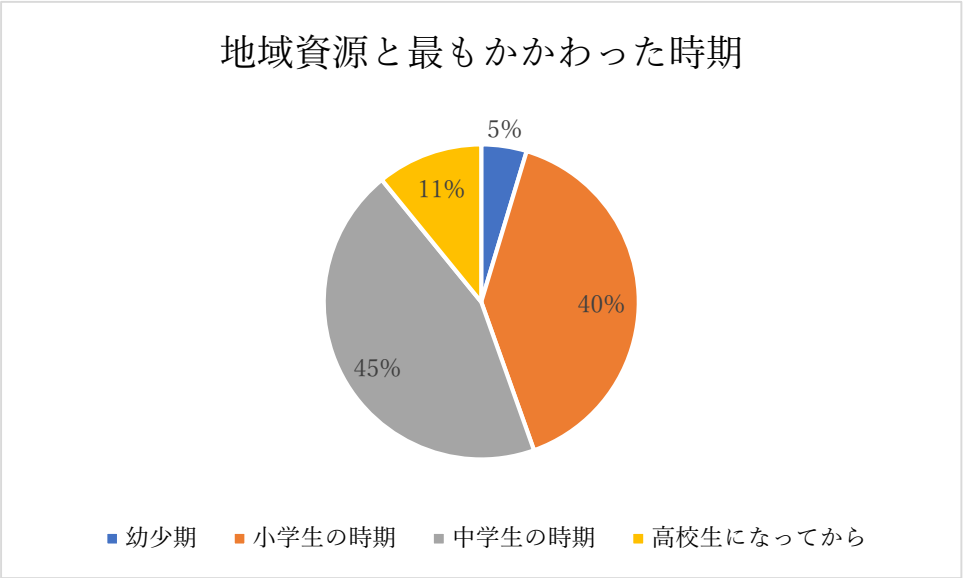


図 15　地域資源と最もかかわった時期の単純集計

はじめに，地域資源と最もかかわった時期の単純集計をおこなった．その結果が図 15 である．その特徴として，現段階の高校生は「中学生の時期」に比較的地域資源と触れ合う機会が多いことがわかる．ただ，これだけでは，地域愛着との関係性が不明のため，地域愛着とのクロス集計を行い，地域愛着を醸成するための地域資源と触れ合う効果的な時期を明確にする．その結果が図 16 である．

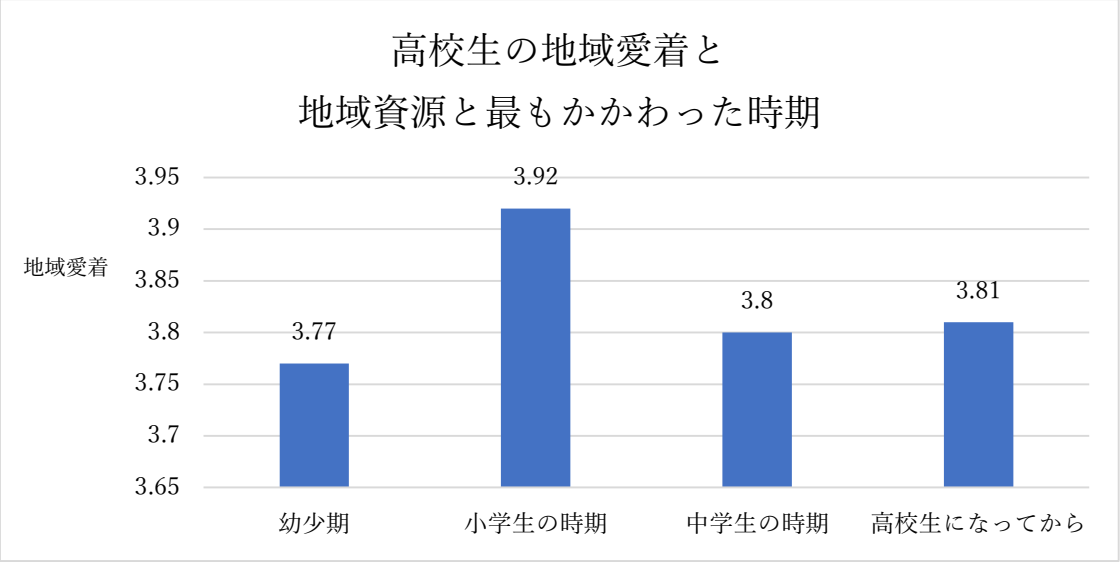


図 16 高校生の地域愛着と地域資源と最もかかわった時期のクロス集計結果

図 16 では,「小学生の時期」が地域資源と最もかかわった時期と答えた高校生は，比較的ほかの時期よりも地域愛着が高い傾向であり，図 15 とは違った結果を得ることができた．また，集計する際に「中学生/高校生」は 3 年間と「小学生」との年数が違ったため，6 年間で期間を統一した結果，同じような結果を得ることができた．

よって,「小学生の時期」に，家族や近所の人と地域資源の話をするなどの「日常生活」に近い取り組みをはじめとして，地域資源との接触を促進することが，地域愛着(選好/感情/持続願望)を醸成するのに効果的であるといえる．また，地域資源接触が高校生の地域愛着を高める結果が出たことから，地域愛着を介して定住意識「定住」および定住意識「外部関係」を醸成するプロセスが存在する可能性が示唆された．

6.4 地域資源接触による定住意識醸成のプロセス分析

6.2 および 6.3 の分析結果から，地域愛着を介して地域資源接触による定住意識醸成のプロセスが存在する可能性が示唆された．それらに加えて，堤の研究では地域活動に協力的な人ほど，地域資源に接触しているという結果から，地域資源接触から地域愛着を持たなくても，定住意識を醸成する直接効果があると解釈した．ただ，様々な既存研究から地域愛着に関するものが多く，協力的行動や伝統重視，他者への依存度の低下等の結果が示唆されていることから，地域資源接触による定住意識醸成の直接効果よりも，地域愛着を介した地域資源接触による定住意識醸成の間接効果のほうが高い影響度があると考えた．このことから，以下では仮説④を立証するための分析結果および本研究で用いた“地域資源接触”“高校生の地域愛着”“高校生の定住意識”の関係性を示した最終的なモデルを提示する．

分析にあたっては共分散構造分析を用いて，有意水準 10%で統計的に有意であると判断されたパスを示し，誤差項を省略した．パスに記載している数値に関しては，上段が標準化係数，下段は t 値を示し，赤字の数値は総合効果を示す．また t 値に付した *印の意味は,これまでと同様である．

事前に地域資源接触から定住意識「定住」「外部関係」に直接パスを引いたモデルを作成したところ，統計的に有意なパスが存在しない結果となった．つまりは，堤の研究で得られた結果と違い，地域資源接触による高校生の定住意識醸成の直接効果は存在しない可能性が示唆された．やはり，地域愛着を介した地域資源接触による定住意識醸成の間接効果の影響度のほうが大きいといえる．つまりは，やみくもに地域資源との接触を促すのではなく，地域愛着を醸成するのに必要な接触を増やすことが，高校生の定住意識を高めるのに効果的であると解釈できる．図 17 は定住意識「定住」のモデルだが，定住意識「外部関係」も同様な結果となった．

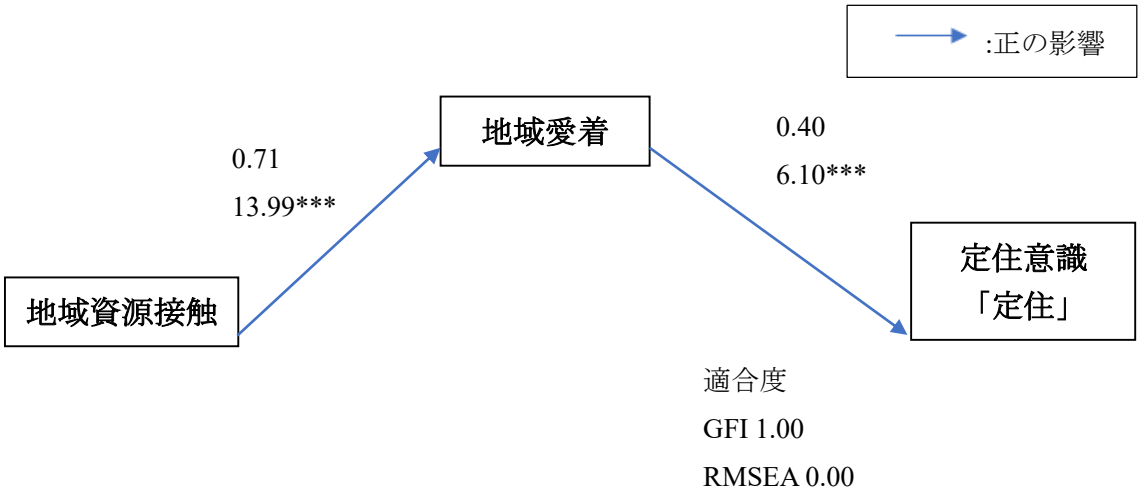


図 17 地域資源接触による定住意識「定住」醸成のプロセス

地域資源接触による直接効果のパスを除いた“地域資源接触”“高校生の地域愛着”“高校生の定住意識”の関係性を示した最終的なモデルを図 18 に示す．地域資源接触によって，高校生の地域愛着を介した定住意識醸成の因果関係が存在する可能性を，統計的に支持するものであるといえる．また，地域資源接触によって最も影響を受けるのは地域に対して，親しさを感じる度合い地域愛着「感情」であり，やはり鈴木らをはじめとした地域愛着の既存研究での，地域愛着(選好)が影響を受けやすいといったものと違った結果が得られた．これは，地域資源接触という違った指標を用いたことも要因としてあげられるが，対象地域∧対象年齢が高校生という条件からも違った結果が得られたと解釈できる．また，共通して地域愛着「感情」，地域に対して親しさを感じる感情を強めることが，高校生の定住意識「定住」「外部関係」を醸成する可能性があるとともに，定住意識「外部関係」のみ，地域に対する願いの度合い地域愛着「持続願望」も，外部からも関わりを持ち続けたいという定住意識「外部関係」を高めることに影響している可能性が示されている．ただ，地域愛着間にも有意なパスが存在するため，地域資源を建造物/自然/コミュニティでみた場合，“自然・コミュニティ”に分類される地域資源と効果的な接触「日常生活」に近い取り組みを，特に小学生の時期に促すことができれば，最終的に地域愛着(感情)や地域愛着(持続願望)に影響を及ぼして，より多くの高校生の定住意識醸成につながると考えられる．

ただ，定住意識「外部関係」のモデルに関しては，RMSEA が 0.12 を超えている結果から，示したモデル以外にも地域愛着または地域愛着を醸成する地域資源との接触以外にも違った要因があると解釈できる．今後は，その潜在的なモデルを明確にするためにも，定住意識に関する研究を進めていく必要がある．

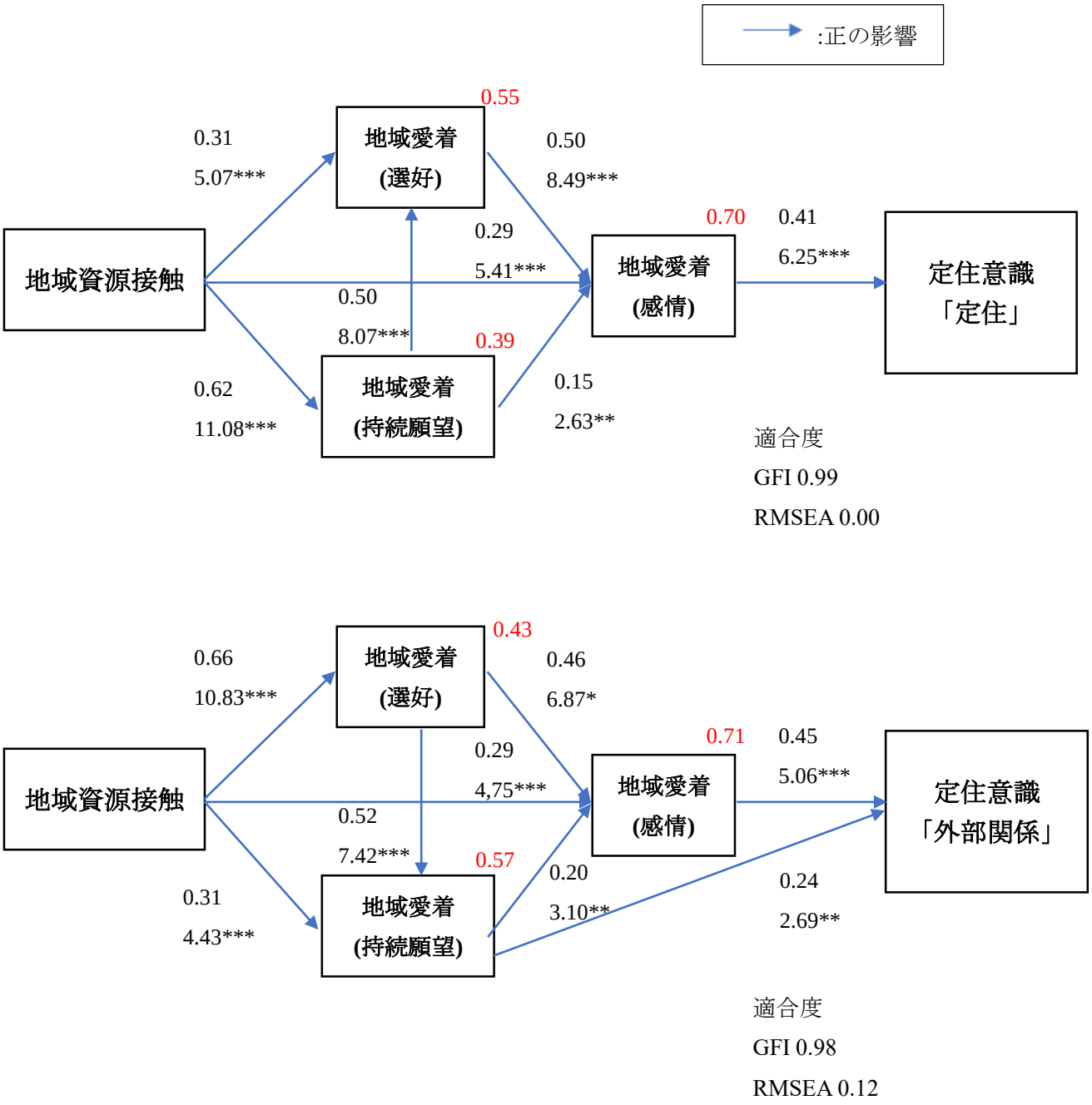


図 18 “地域資源接触”“高校生の地域愛着”“高校生の定住意識”の関係性

第 7 章　まとめ

7.1 本研究の結論

本研究では，高校卒業後も地域とのかかわりを強める一つの要素として「定住意識」に着目し，地域資源接触と地域愛着の観点から高校生の定住意識を醸成するために，大野市の高校生にアンケートを実施して，関係性を明らかにした．本研究では仮説を 4 つ設け，その仮説に沿って分析を行った．その結果を以下に示す．

仮説①：

地域愛着(選好/感情/持続願望) が強まれば，高校生の定住意識を醸成することができる．

地域愛着(選好/感情/持続願望)が強い高校生ほど，定住意識「定住」/「外部関係」を高める傾向が示唆された．その中で定住意識「定住」/「外部関係」共通して最も影響しているのは，地域に親しさを感じる度合い「感情」の地域愛着が強いという特徴が明らかとなった．

仮説②：

定住意識「定住」と定住意識「外部関係」の醸成では，地域に対する願いや永続願望の尺度である地域愛着(持続願望)の影響度に違いが生まれる．

定住意識「定住」と定住意識「外部関係」で大きな違いがあったのは，地域に対して変わってほしくないものがあるという“願い”の度合い「持続願望」の地域愛着であった．そういった“願い”を地域に対して強く持つことが，高校生の定住意識「外部関係」を醸成するということが明らかとなった．

仮説③：

地域愛着(選好/心情/願望)を醸成する，高校生(若者)ならではの効果的な地域資源の触れ合い方がある．

地域資源接触を促すことができれば，高校生の地域愛着(選好/心情/願望)を醸成することができる．特に地域愛着(感情)が地域資源接触から最も影響を受けることがわかった．また，効果的な触れ合い方として，家族や近所の人と地域資源について話す機会を設ける等などの「日常生活」に近い取り組みを促し，かつ「小学生の時期」に地域資源接触のアプローチをすることが，高校生の地域愛着を高めるのに最も効果的であるということが示唆された．また，高校生の地域愛着を醸成する地域資源の種類は，本研究で用いた地域資源を建造物/自然/コミュニティでみた場合，飲食物や自然環境等の“自然”，祭り等の“コミュニティ”に分類される地域資源と触れ合うことが，比較的地域愛着を高めるのに効果的であるという結果が得られた．

仮説④：
地域資源接触から定住意識醸成への直接効果より，地域愛着を介した定住意識醸成への間接効果の方が，影響度が高くなる．

共分散構造分析を用いて分析をおこなった結果，地域資源接触から定住意識「定住」/「外部関係」に直接影響するパスは，統計的に有意ではないことが明らかとなった．つまりは，直接効果より，地域愛着を介した間接効果の方が，定住意識「定住」/「外部関係」を醸成しやすいことが分かった．ただ単に，地域資源との接触量を増やすのではなく，高校生の地域愛着を醸成する効果的な地域資源との接触を促すことが，定住意識醸成には効果的であるといえる．

以上の結果から，地域資源接触が地域愛着を介して，高校生の定住意識醸成に影響を及ぼすという因果関係が存在する可能性を，統計的に支持するものといえる．

現在人口が減少している地方都市で，学生を始め多くの人が「働きたい」と思うような雇用先や環境を確保することが，人口を増加させるためには第一である．ただ，それだけでは地域が活性化するかどうかは過去の動向から言い難い．もう一つの要因として，地域に愛着を持つことも叫ばれているため，本研究で示した地域資源接触を促し，高校生の地域愛着そして定住意識を醸成することも重要である．

7.2 大野市への提案

本研究では，効果的な地域資源接触を促すことができれば，地域愛着を介して定住意識を醸成するプロセスが存在することが統計的に示唆された．まず，どのような地域資源と触れ合うことが効果的かについてだが，地域資源を建造物/自然/コミュニティでみた場合，飲食物や自然環境等の“自然”，祭り等の“コミュニティ”に分類される地域資源と触れ合うことが比較的高校生の地域愛着を高めるのに効果的であるという結果が得られた．

また地域資源と触れ合うシチュエーションに関しては，若者は「日常生活」に近い取り組みを促すことが，地域愛着を強め定住意識を醸成するのに最も効果的であるといえる．例えば，「家族や近所の人と地域資源に関する話をすること」「散歩やネット等，生活の中で地域資源に関するものを目にすること」などが考えられる．堤の研究での「イベント」ではなく，高校生をはじめ，若者に関しては身近な触れ合いを促すことが重要である．具体的な例を以下に挙げる．

① 大野市の「高校生議会」もしくは「ワークショップ」を開催し，ご家族や近所の人も参加する形式で，大野市の地域資源について話をする．
② 大野市の地域資源に関する資料を作成し，今後の大野市について家族で議論し，提案をするなどといった夏休みの宿題を実施する．

③　「大野へかえろうプロジェクト」の一環として，身近に大野市の地域資源についての情報を知ることができる動画やホームページなどを作成する．

また，アプローチをする時期として，より適切なのは「小学生の時期」である．「小学生の時期」に，特に“自然やコミュニティ”に分類された地域資源と，身近に触れ合う「日常生活」に近い取り組みをはじめとして，地域資源接触を促すことで，高校生になってから地域愛着が強まり，最終的に定住意識を醸成できるといえる．具体的な例を挙げる．

①　「学級会」や「社会」の時間を使って，大野市の地域資源に関する授業を行い，家族と話し合う機会を設けた宿題を出す．

②　遠足等で大野市の地域資源を目にする機会を設けた後，家族と話したことなどを書いてもらうような課外活動を実施する

さらに，定住意識「定住」/「外部関係」を醸成するのに，親しさを感じる度合い地域愛着「感情」が共通して影響し，定住意識「外部関係」に関しては，地域に対して願いや永続願望の尺度である地域愛着「持続願望」が，大きく影響する特徴があると示唆された．大野市では総合計画策定時において，高校生にアンケートを実施していることから，今後はアンケート項目に，高校生にとって“地域に親しさを感じるもの”や“大野市の中で，いつまでも変わってほしくないものは何か”を聞き出すことができれば，「定住意識」をはじめ，地域との関わりを強めるための今後の活動や施策の展望等に，より具体的につなげることができると考えられる．

なお，本報告書は，関西大学環境都市工学部澤本凱智君の卒業研究として行ったものである．

参考文献

1. 羽鳥剛史：地域コミュニティにおける離脱と発言に関する研究-A.O.ハーシュマンの離脱・発言理論の示唆-，都市計画論文集, Vol.47, No.3, pp.991-996, 2012.
2. 定住自立圏構想研究会：定住自立圏構想研究会報告書 ~住みたいまちで暮らせる日本を~，総務省, 2008.
3. 李永俊，杉浦裕晃：地元回帰の決定要因とその促進策 -青森県弘前市の事例から-，財務省財務総合政策研究所「フィナンシャル・レビュー」，平成 29 年第 3 号(通巻第 131 号), pp.123-143, 2017.
4. 辰野町：移住定住に関する意識調査・アンケート集計結果, 2017.
5. 堤 章開：地域資源接触量と地域愛着からみた住民の地域活動への参加を促すための提案 -福井県大野市において-，関西大学卒業論文, 2017.
6. Brown, G., Brown, B. and Perkins, D. : New housing as neighborhood revitalization –place attachment and confidence among residents–, *Environmental and Behavior*, Vol.36, No.6, pp.749-775, 2004.
7. Brown, B., Perkins, D. and Brown, G. : Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis, *Journal of Environmental Psychology*, Vol.23, pp.259-271, 2003.
8. 鈴木春奈，藤井聡：「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究，土木学会論文集 D, Vol.64, No.2, pp.179-189, 2008.
9. 鈴木春奈，藤井聡：地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究，土木計画学研究・論文集, Vol.25, No.2, pp.357-362, 2008.
10. 羽鳥剛史，片岡由香，尾崎誠：市民活動の持続可能性に関する心理要因分析，土木学会論文集 D3, Vol.72, No.5(土木計画学研究・論文集第 33 巻), pp. I_407-I_414, 2016.
11. 菊澤育代，近藤加代子：幸福度が定住意向に与える影響に関する研究-宗像市日の里地区を事例に-，日本建築学会計画系論文集，第 84 巻，第 755 号, pp.129-136, 2019.
12. Hidalgo, M. and Hernandez, B. : Place attachment : conceptual and empirical questions, *Journal of Environmental Psychology*, Vol.21, pp.273-281, 2001.
13. 武 基雄，竹内寿一，松井俊一：愛着性と定住性の研究：3-定住性の概念構成：都市計画，日本建築学会学術講演梗概集．計画系, pp.2015-2016, 1982.
14. 武 基雄，竹内寿一，松井俊一：愛着性と定住性の研究：1-愛着性：都市計画，日本建築学会大会学術講演梗概集．計画系, pp.2011-2012, 1982.